

密教經典に説かれる開敷華王如来について

飯塚 秀 誉

はじめに

開敷華王如来は、胎蔵界曼荼羅の中では四方四仏中、南方に位置する尊格である。胎蔵界曼荼羅の中心を担う尊格群の一員であり、一方向を司る主要な尊格にもかかわらず、その系統、性格ははっきりしない。

開敷華王如来は梵名をサンクスミタ・ラージャ・インドラ (Saṃkusumitārājendra) と言い、その名が示す通り華の開敷をイメージした尊格である。漢訳では開敷華王、開花王、華開敷と訳され、三矩蘇弭多、僧姑蘇密多と音写される。チベット語では開敷華王自在 (me tog kun du skyes pa rgyal poḥi dbaṅ po) と訳される。同尊は、『大日経』では、「具縁品」と「入秘密曼荼羅位品」の両品に説かれるが、『金剛頂経』以降には見られない。『大日経』「具縁品」では、宝幢如来、無量寿如来、不動（阿閼）如来と共に説かれ、「入秘密曼荼羅位品」では、一切世間最尊特身を中心とした八葉蓮華中に説かれる。このように『大日経』に説く諸尊の集会において中心的な役割を担う尊格である。

また、『大日経疏』では、開敷華王如来は「娑羅樹王華開敷」と呼ばれる^{註(1)}。この記述は開敷華王如来を論じる際、しばしば重要視されている^{註(2)}。

我が国における真言宗に伝わる胎蔵法では、印相を金剛不壊印とし、真言は「南麼三曼多勃駄喃 鏤縛 莎縛訶」と伝承される。さらに図像表現として現図曼荼羅では、左手袈裟角を持ち、右手は施無為印で表わされる^{註(3)}。

言うまでもなく、密教及び我が国の真言宗にとって無視できない重要な尊格のうちの一尊である。しかし密教儀軌において開敷華王如来が説かれることは希である。密教儀軌の中で同尊の登場回数は、他の四方四仏に比べ圧倒的に少ない。

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

開敷華王如来を説く密教經典

開敷華王如来が説かれる密教經典を挙げてみれば、『一字仏頂輪王經』『金剛手灌頂タントラ』『大日經』等、ほんの僅かではない。現在までに知り得る開敷華王如来の登場する密教經典を示せば、次の如くである。

- ①『仏説聖寶藏神儀軌經』
 - ②『三種悉地破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼法』
 - ③『念誦結護法普通諸部』
 - ④『文殊師利法寶藏陀羅尼經』
 - ⑤『文殊師利寶藏陀羅尼經』
 - ⑥『一字仏頂輪王經』
 - ⑦『金剛手灌頂タントラ』
 - ⑧『大毘盧遮那成仏神變加持經』
 - ⑨『惡趣清淨タントラ』（Sarvadurgatipariśodhanatantra）
 - ⑩『文殊師利根本儀軌經』（Mañjuśrīmūlakalpa）
- ①『仏説聖寶藏神儀軌經』二卷 宋法天訳（大正 21 p.349）は、儀軌を持誦する法として曼荼羅を作り、供養し、供献の物を明かすものであるが、この中に東方開敷華王如来が説かれる。
- ②『三種悉地破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼法』一卷 唐善無畏訳（大正 18 p.911c）
善無畏の訳とされるが、中国の經録にも記載されず、入唐八家の将来録にも見られない。金胎両方の要素を合わせ、また道教や陰陽道などの中国の影響を受けた偽經である。
- ③『念誦結護法普通諸部』一卷 唐金剛智述（大正 18 p.904c）
金剛智が灌頂の弟子に授けたとされるが、中国の經録にも記載されず、空海・円仁・円珍等も将来しておらず、明らかに偽作である。唐末中国密教の成立と見られる。
- ④『文殊師利法寶藏陀羅尼經』一卷 唐菩提流支訳（大正 20 p.796a—b）
は、陀羅尼の効果を高めるための十一尊を礼拝の対象としており、その中に開敷華王如来が存在する。

⑤『文殊師利寶藏陀羅尼經』一卷 唐菩提流支訳 (大正 20 p.804c) は④の異訳である。内容は④より多少詳しくなっている。

⑥『一字仏頂輪王經』五卷 唐菩提流志訳 (大正 19 p.247c) は、「大法壇品」において曼荼羅が説かれる。この曼荼羅の東方の第二院に説かれる四尊が、『大日經』「具縁品」に説かれる四仏と一致することから、『大日經』系曼荼羅に影響を与えた曼荼羅として注目されるものである。

類本として、『菩提場所説一字頂輪王經』五卷 (大正 19 唐 不空訳) 『五仏頂三昧陀羅尼經』四卷 (大正 19 唐 菩提流志訳) がある。このうち、開敷華王如来を含む曼荼羅を説く「大法壇品」は、対応する個所が類本には存在せず、成立に関して若干の疑問が残る。なおチベット訳は存在しない。

⑦『金剛手灌頂タントラ』^{註(4)}は漢訳された形跡がない。酒井真典博士により、『金剛手灌頂タントラ』と『大日經』との関係が指摘され^{註(5)}、注目された。開敷華王如来は曼荼羅等、主に四方四仏として説かれる。

『金剛手灌頂タントラ』に現れる開敷華王如来は次の五箇所である。

⑧『大日經』七卷 唐善無畏 一行訳 (大正 18p. 1) では、「具縁品」「入秘密曼荼羅位品」の両品に開敷華王如来が説かれる^{註(6)}。「具縁品」に於て曼荼羅建立の前供養として説かれ、「入秘密曼荼羅位品」では、一切世間最尊特身を中心とした八葉蓮華のなかに説かれる。開敷華王如来は、両品とも四方四仏として説かれている。

⑨『悪趣清浄タントラ』^{註(7)}において、開敷華王如来 (と思われる) を説く個所は、チベット訳の旧訳のみに見られる。新訳に相当するサンスクリットテキストや漢訳には見られない。

ここでは普明毘盧遮那を中心とした曼荼羅を説き、四仏の中に開敷華王如来の名が見られる。しかしチベット訳では「花」としか記述されず、後の解釈が必要となる。なお、『悪趣清浄タントラ』に説かれる開敷華王如来を含めた四仏は鳥獣座に座しており、明らかに『金剛頂經』系であるとされ、開敷華王如来の名称のみ残ったとする^{註(8)}。

⑩『文殊師利根本儀軌經』^{註(9)}において開敷華王如来は重要な尊格として曼荼羅中、パタ (画像) 等、多数登場する。詳細については拙稿「Mañjuśrī-mūlakalpa における開敷華王如来」(『密教学研究』第三十四号掲載予定) を御覧頂きたい。

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

このように、開敷華王如来を説く經典のリストの中から偽經を除くと、その数はさらに少なくなり、極めて限られた經典にしかその姿を確認できない。

これら諸經に説かれる開敷華王如来を、(1) 訳語 (2) 文殊菩薩との関係、(3) 四方四仏、(4) 娑羅樹王との関連、(5) 真言の五つに分け、開敷華王如来の具体相を見てみたい。

(1) 訳語の問題

開敷華王如来のサンスクリット語表記は [saṃkusumita-rāja-indra] であるが、それに対応するチベット語表記、漢訳表記とも一定していない。

[a] 『文殊根本儀軌經』では次の訳語が与えられている。

チベット語訳者 tr: T.Kumārakalaśa, Śākya blo gros 11 世紀初頭
漢訳者 宋代 天息災訳 (A.D.986)

saṃkusumita-rāja-indra	㉑ me tog kun du skyes pa rgyal poḥi dbaṅ po ㉒ me tog yan dag par skyes paḥi rgyal po ㉓ me tog yan dag par skyes paḥi dbaṅ poḥi rgyal po ㉔ me tog yan dag par skyes paḥi rgyal poḥi dbaṅ po ㉕ me tog kun tu skyes paḥi rgyal po	開華王如来
muni saṃkusumāhvaya	㉖ me tog kun skyes pa	
saṃkusumita (第二章 真言中)	音写語	音写語

現在までのところ、開敷華王如来の尊名のサンスクリット語表記が確認できるものは『文殊師利根本儀軌經』のみである。チベット語訳を見ると何種類かの表記が認められる。㉑㉒は第一章に認められ、㉓は第一章・第四章・第六章、㉔は第二章・第五章・第八章、㉕は第三十四章、㉖は第三十七章にそれぞれ認められる。

[b] 『金剛手灌頂タントラ』では次の五種類の訳語が認められる。

① me tog kun tu rgyas paḥi rgyal poḥi dbaṅ po	十方仏中
② me tog <u>śin tu rgyas</u> paḥi rgyal poḥi dbaṅ po	曼荼羅
③ me tog kun du rgyas pa	瓶水灌頂
④ <u>me tog cher rgyas</u> rgyal baḥi dbaṅ po	画像
⑤ me tog kun du rgyas paḥi dbaṅ poḥi rgyal po	諸如来の印

チベット語訳者 tr:Śilendrabodhi / Ye Ses sde

- ① 『大日経』の①、『大日経広釈』に同じ
 ② śin tu rgyas pa = saṃkusumita cf. Tib.-Skt.Dic.
 ③ 『大日経』の㊦
 ④ me tog cher rgyas = saṃkusumita (?) cf. Tib.-Skt.Dic.

『金剛手灌頂タントラ』では開敷華王如来の登場は五個所認められる。開敷華王如来の登場する箇所すべての訳語に相違がある。①は十方仏の一員として説かれるが、その訳語は『大日経』の「入秘密曼荼羅位品」の訳語と同じである。③は『大日経』「具縁品」に同じである。

[c] 『大日経』では二個所に登場するが、㊦は『金剛手灌頂タントラ』の③の訳語に一致し、①は『大日経広釈』『金剛手灌頂タントラ』の①に相当する。

『大日経』チベット語訳者 tr:Śilendrabodhi/dpal brtegs 9世紀初頭
 漢訳者 唐代 善無畏

「具縁品」	㊦ me tog kun rgyas	華開敷
「入秘密曼荼羅位品」	① me tog kun tu rgyas paḥi rgyal poḥi dbaṅ po	開敷華王

㊦ 『金剛手灌頂タントラ』の③

① 『大日経広釈』、『金剛手灌頂タントラ』の①に同じ

(2) 開敷華王如来と文殊菩薩

開敷華王如来は、『文殊師利根本儀軌経』及び『金剛手灌頂タントラ』の両経において、文殊菩薩との強い関係が見られる。まず、『文殊師利根本儀軌経』では、開敷華王如来の登場する多くの章において、両尊の関係は見る事ができる。とくに第一章において開敷華王如来は文殊菩薩の本国主として描写されているのは興味深い。これまで重要な尊格にもかかわらず、ほとんどその素性の知られなかった同尊の系譜を伺い知る一面が示されている。また、第四章以降に説かれるパタと呼ばれる尊像画においても、開敷華王如来と文殊菩薩の関係を見ることができる。さらに第六章においては文殊菩薩を中心とした数尊からなる画像において、その関係は顕著である。その他、本経後半にも開敷華王如来に数個所言及するが、やはり両尊の関係を読み取ることができる。

密教経典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

このように、『文殊師利根本儀軌経』において開敷華王如来と文殊菩薩の関係が明確に示されている。

『文殊師利根本儀軌経』第一章より要約

浄居天上に居る釈迦牟尼世尊が、浄居天衆の求めに応じ、文殊の儀軌を説く。釈尊は清浄境界破暗光明と名く三摩地に住す。すると釈尊の眉間から光が発し、東北方の開華世界に入って、開華王如来の童子である文殊菩薩の頭頂に入る。このようにして文殊はこの光により、釈迦のところに行くことを願い、開華王如来は文殊の願いを許して、文殊の根本真言、内心真言、外心真言を授ける。そして娑婆世界浄居天上に到り広く是を解説せよと命ずるのである。そして、文殊がそこで禅定に入ると、四方に仏菩薩が充満する。開華王如来は文殊のこの入定を讚し、この定は十地の菩薩も入ることができないと述べる。

また『金剛手灌頂タントラ』においても開敷華王如来と文殊菩薩の関係は強い。『金剛手灌頂タントラ』では、『文殊師利根本儀軌経』に見られたのと同じように、文殊菩薩の本国主として開敷華王如来が描写される。

『金剛手灌頂タントラ』序品において、他化自在天に住する毘盧遮那は、「一切の菩薩を正しく歓発する」と名付けられた光線を発し、その光線は十方諸如来の世界に達する。南方世界主開敷華王如来のもとにいる文殊菩薩は毘盧遮那のもとに行くことを願い真言を授かる。

この両経の場面設定を表せば次のようである。

	『金剛手灌頂タントラ』序品	『文殊師利根本儀軌経』第一章
教主	毘盧遮那	釈迦牟尼
方向	南方	東北方 開華世界
住処	他化自在天	浄居天
世界主	開敷華王如来	開敷華王如来

菩薩	文殊菩薩	文殊菩薩
光明	一切の菩薩を正しく勧発する と名付く光線を発する	清浄境界破暗光明と名付く 大光線を発する
	↓	↓
	大光線を感じる	大光線を感じる
	↓	↓
	開敷華王如来より 真言を授かる	開敷華王如来より 真言を授かる
	↓	↓
	毘盧遮那のもとに出発する	釈迦のもとに出発する

開敷華王如来の方向性は、『文殊師利根本儀軌経』が東北方を示すのに対し、『金剛手灌頂タントラ』は南方とあり相違しているが、開敷華王如来と文殊菩薩の関係や場面設定が類似していることは、両経の関連を示唆するものであろう。また『金剛手灌頂タントラ』にも開敷華王如来と文殊菩薩の二尊を中心とした画像が説かれるが、両尊を中心とした画像は、現在までに両経以外知られない。このことから、両経の関係が伺われる。

なお、『仏説聖寶蔵神儀軌経』においても、文殊菩薩の本国を開敷華王如来の国とする設定が見られる。

(3) 四方四仏の中に見る開敷華王如来

開敷華王如来は多くの場合四方四仏^{註10)}の一員として説かれる。四方四仏中で同尊を説く経典は『一字仏頂輪王経』「大法壇品」、『金剛手灌頂タントラ』、『大日経』「具縁品」「入秘密曼荼羅位品」、『文殊師利根本儀軌経』「第二章」である。

開敷華王如来の位置は四方中南方に指示されるされることが多いが、南方との関係は今のところはっきりしない。『文殊師利根本儀軌経』では東方と指定される。

まず、『文殊師利根本儀軌経』では、第二章の土壇曼荼羅中に説かれる。

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

本經は数種類の土壇曼荼羅を説くが、第二章では本經に説かれる曼荼羅のうち最大規模のものが説かれる。この曼荼羅は釈迦牟尼を中尊としているが、釈迦牟尼の下に樓閣中の文殊菩薩を描き、文殊菩薩を中心に形成された曼荼羅ともいえる。

この曼荼羅の基本構造は、内院、第二院、第三院の三重を持ち、仏部、蓮華部、金剛部の三部族を中心として説かれている。テキストの諸尊の位置を示す記述は明確でなく、テキストの記述のみにより具体的に作画することは難しい註(1)。

内院は、釈迦牟尼を中心として、釈迦の右辺に観音族、左辺に金剛族の諸尊が説かれ、十六菩薩、五菩薩、八仏頂等の諸尊が取り囲む。そして、開敷華王如来、宝幢如来、無量寿如来の主要仏が説かれる。釈迦の下には、文殊菩薩が樓閣の中に住している。第二院には、色界・欲界の諸天子が圍繞し、第三院には、ヒンドウの諸尊、星宿が圍繞する。

開敷華王如来が説かれる部分は、内院の諸尊を一通り記述し終わり、四方に塔門を描き、第二院の諸尊を描く前に見られる。開敷華王如来の他に、無量寿如来、宝幢如来が説かれるが、これら三尊は胎藏曼荼羅に見る四方四仏中の三尊に一致し、その関係が示唆されるものである。

当所に見られる開敷華王如来、無量寿如来、宝幢如来らの主要仏は、三尊のみの記述、あるいは方向性が不明確など未整理ではあるが胎藏系曼荼羅の四方四仏を強く予想さる。

『文殊師利根本儀軌經』の尊格グループ

東方 開敷華王如来

宝幢如来

無量寿如来

次に、『一字仏頂輪王經』「大法壇品」において曼荼羅が説かれる。この曼荼羅の東方の第二院に説かれるうちの四尊が、『大日經』「具縁品」に説かれる四仏と一致することから、『大日經』系曼荼羅に影響を与えた曼荼羅として注目されるものである。

類本として、『菩提場所説一字頂輪王經』五卷（大正 19 唐 不空訳 仏頂系儀軌の中でも最も整ったものである）『五仏頂三昧陀羅尼經』四卷（大正 19 唐 菩提

流志訳)がある。このうち、開敷華王如来を含む曼荼羅を説く「大法壇品」に対応する個所は、類本には存在しない註12。

『一字仏頂輪王経』の四仏は第二院の東方の隔に説かれ、四方にそれぞれ位置しているわけではない。四仏の名それぞれに東方・南方等、方向が明記されるだけである。私見によれば、この方向の明記は、漢訳者(菩提流支)による後の付加によるものと思われる。

この中、南方開敷華王如来と記述される。

『一字仏頂輪王経』の四仏

東方 宝星(宝幢)如来

南方 開敷華王如来

西方 無量光如来

北方 阿閼如来

次に、『金剛手灌頂タントラ』に説かれる四仏説は、十方仏、八方仏、あるいは方向性の示されない八尊の尊格グループの中に説かれている。四仏以外の尊格は、過去仏であったり、普賢、弥勒等、一様でない。しかし、四仏だけ見た場合、方向性、尊格の名称は一致しており確立している。このように『金剛手灌頂タントラ』において、開敷華王如来は確立した四仏体系の中に組み込まれているのが分かる。ここでは開敷華王如来は、すべて南方仏として指定される。

開敷華王如来が『金剛手灌頂タントラ』の中で四仏として登場するのは次の箇所である。

- a. 十方諸如来
- b. 曼荼羅
- c. 瓶水灌頂
- d. 諸如来の印・真言

まず、a.十方諸如来の箇所では、毘盧遮那より発せられた光明により、十方諸如来の元にいる諸菩薩が、如来の許しを得て毘盧遮那の所へ出向く場面である。この十方の如来は宝幢を始めとした四如来と北東持最勝宝、東南吉祥、南西大金剛幢、西北美声、下方清浄宝蓮華、上方勝者生である。このうち、開敷華王如来のもとにいる菩薩が文殊菩薩であることは興味深い。なぜなら、『文殊師利根本儀軌経』第一章において、開敷華王如来は文殊菩薩の世界主として

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

描写されているからである。

b.は曼荼羅において中尊を取り囲む四方四仏として説かれ、隅方には尸棄如来、毘婆尸如来、毘舍浮如来、俱留孫如来の過去仏が説かれる。

c.は瓶水灌頂の場面であるが、四仏と普賢、除一切蓋障、弥勒、地藏の諸尊によって加持された瓶水でもって灌頂を行うというものである。

d.は多数の諸如来の印と真言を説くものである。

先述のように、『金剛手灌頂タントラ』に数個所説かれる四仏は一定している。しかし、その他の同時に説かれる諸尊については、過去仏であったり普賢

『金剛手灌頂タントラ』に見られる四仏				
	a. 十方諸如来 (第一卷 p.434、8)	b. 曼荼羅作画 (第三卷 p.442、69)	c. 瓶水灌頂 (方向性無し) (第四卷 p.448、80)	d. 諸如来の印 (方向性無し) (第九卷 p.467、240)
東方	宝幢 rin cen tog	宝幢如来 rin chen me tog	宝幢 rin po che me tog	宝幢 rin po che tog
南方	開敷華王如来 訳語①	開敷華王如来 訳語②	開敷華王 訳語③	開敷華王如来 訳語⑤
西方	無量光 hod dpag med	無量光如来 hod dpag med	無量光 hod dpag med	無量光 hod dpag med
北方	不動 mi hkhrugs pa	不動如来 mi hkhrugs pa	不動 mi hkhrugs pa	不動如来 mi hkhrugs pa
北東	持最勝宝	尸棄如来	普賢	尸棄
東南	吉祥	毘婆尸如来	除一切蓋障	毘婆尸
南西	大金剛幢	毘舍浮如来	弥勒	毘舍浮
西北	美しい声	拘留尊如来	地藏	拘留尊
下方	清浄宝蓮華			その他* 1
上方	勝者生			

* 1 大転輪の頭 仏頂 眼 輪 吉祥印 臍 足

を始めとした菩薩であったりと一様でない。固定された四仏に、その修法や理念に応じた尊格を要求したのだろう。逆に言えば、それだけ『金剛手灌頂タントラ』において固定された四仏は重要性を持つ。

『金剛手灌頂タントラ』に説かれた四方四仏は、次に続く『大日経』「具縁品」に受け継がれることになる。

『金剛手灌頂タントラ』に説かれる四仏

東方 宝幢
南方 開敷華王如来
西方 無量寿
北方 阿閼

次に、『大日経』では、「具縁品」「入秘密曼荼羅位品」の両品に開敷華王如来は説かれる。

「具縁品」に於て曼荼羅建立の前供養として説かれ、「入秘密曼荼羅位品」では、一切世間最尊特身を中心とした八葉蓮華の中に説かれる。このように、『大日経』に於ける四方四仏は、経中に二個所説かれる訳であるが、北方仏に変化がある。「具縁品」に説かれる四仏の北方仏は阿門であり、もう一方の「入秘密曼荼羅位品」では天鼓雷音が説かれる。このうち、実際の曼荼羅などに図像表現されるのは、後者の、北方に天鼓雷音を配するタイプの四仏であり、「具縁品」系の四仏を配する例は、『胎藏旧図様』を除いて伝わっていない。(頼富本宏『密教仏の研究』p.154)

開敷華王如来は、両品とも四方四仏の南方仏として説かれている。

「具縁品」四仏

東方 宝幢
南方 開敷華王如来
西方 無量寿
北方 不動(阿閼)

「入秘密曼荼羅位品」四仏

東方 宝幢
南方 開敷華王如来
西方 無量寿
北方 天鼓雷音

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

次に、『悪趣清浄タントラ』において、開敷華王如来を説く（と思われる）箇所は、チベット訳の旧訳のみに見られる。新訳に相当するサンスクリットテキストや漢訳には見られない。

ここでは普明毘盧遮那を中心とした曼荼羅を説き、四仏の中に開敷華王如来の名が見られる。しかしチベット訳では「花」としか記述されず、後の解釈が必要となる。

以上のように、開敷華王如来は四方四仏の中に、主に南方仏として主要な位置を占める。

筆者は、現段階では次のような展開を予想している。すなわち、『文殊師利根本儀軌経』「第二章」において主要仏と共に四仏の観念の中に組み込まれた開敷華王如来は、『一字仏頂輪王経』「大法壇品」を経て、『金剛手灌頂タントラ』において開敷華王如来を含めた四方四仏として確立する。『金剛手灌頂タントラ』で確立した四方四仏が『大日経』に受け継がれて行くのである。

なお、開敷華王如来を含む四方四仏の表を、最後に添付してある。

(4) 娑羅樹王と開敷華王如来

『大日経疏』における「娑羅樹王華開敷」という記述が、開敷華王如来の系譜を探るうえでしばしば重要視された。冒頭でも述べたように、この『大日経疏』の記述から、娑羅樹王仏という仏と開敷華王如来を同体と見なし、娑羅樹王仏の展開を開敷華王如来のそれと論じられることもある。また、『離垢慧菩薩所問礼仏法経』（『大正』14 p.698）には、胎藏系の四仏の名、毘盧遮那がみられ、さらに娑羅樹王の名が見られることから、娑羅樹王をもって開敷華王如来と見做し、ここに胎藏五仏が具備するとする主張もある^{註⑬}。

『離垢慧菩薩所問礼仏法経』（『大正』14p.）にみる十方仏

東方阿閼	東南因陀羅鷄都幢王
南方宝相	西南宝遊歩
西方無量寿	西北娑羅因陀羅王
北方微妙声	東北無量幢
	上方智光
	下方毘盧遮那

しかし、いくつかの密教經典には開敷華王如来と娑羅樹王仏の両尊を、違う

尊格として併記する例が見られる。

まず、『文殊師利根本儀軌經』には、これら両尊を同じ尊格群の中で説く個所がある。第四章ではパタ（画像）に説かれ、八如来という一つの尊格群の中に両尊は見られる。第三十七章では、過去より法を伝えた諸尊として十六尊が挙げられ、開敷華王如来は筆頭に示される。続いて娑羅樹王仏と続く。

次に、『文殊師利法宝蔵陀羅尼經』と、その異訳である『文殊師利宝蔵陀羅尼經』には、開敷華王如来と娑羅樹王仏の両尊を、礼拝の対象として別な尊格として扱っている。

『文殊師利法寶蔵陀羅尼經』（『大正』20 p.796a）の例

敬礼	娑羅王佛	梵名	娑禮捺羅羅惹
敬礼	開敷華王佛	梵名	三矩蘇弭多
敬礼	寶幢佛	梵名	羅旦曩計都
敬礼	阿弥陀仏	梵名	阿弭多婆野
敬礼	無量寿智佛	梵名	阿弭多 孃曩
敬礼	山王佛	梵名	勢禮捺羅惹
敬礼	作日光佛	梵名	爾崩迦羅
敬礼	極安穩佛	梵名	蘇乞史麼
敬礼	善眼佛	梵名	蘇齊旦羅
敬礼	法幢佛	梵名	達麼計都
敬礼	光髮佛	梵名	不禮婆麼里

これら複数の例が示すように、両尊は違った個性を持つ別な尊格として説かれ礼拝の対象とされており、両尊を直ちに同体と見ることはできないであろう。娑羅樹王の展開をもって開敷華王如来のそれとするには、些か無理があるように思える。

『大日經疏』の「娑羅樹王華開敷」と言う記述について、筆者は現段階では、開敷華王如来と言う花の開敷をイメージした尊格に、釈迦入滅時の象徴である娑羅樹が結びつけられ記述されたものであり、娑羅樹王仏と言う尊格を開敷華王如来と同体としているのではないと思っている。

いずれにしても、開敷華王如来と娑羅樹王仏とは併記されることはあっても、完全に同体の尊格とは言えない。

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

(5) 開敷華王如来の真言

開敷華王如来の真言は、現在まで我が真言宗に伝わる真言である「ノウマク
サマンダボダナン バンバクソワカ (Namaḥ samantabuddhānāṃ vaṃ vaḥ svāhā)」
である。この真言は『大日経』「秘密八印品」に説かれるものである。同尊の
真言は、現在までにこの真言が伝わるのみである。

『文殊師利根本儀軌経』第二章には、四十一種類の真言が説かれる。その中
につぎの開敷華王如来の真言が含まれる。

献花真言 (Vai.p.18 Śāstri.p.28)

namaḥ sarvabuddhānām apratihataśāsanānām / namaḥ saṃkusumita-
rājasya tathāgatasya / tadyathā — kusume kusume kusumāḍhye
kusumapuravāsini kusumāvati svāhā

無碍なる教えを説く一切諸仏に帰命し奉る。開敷華王如来に帰命し奉る。
すなわち……花を持つものよ、花を持つものよ、花に富んだものよ、花の
城にすみ、花を持つものよ、スヴァーハー

この真言は、曼荼羅造壇法の前に説かれる、献水、献香等続く献花の真言
である。この真言は、saṃkusumitarāja あるいは kusumāvati という語が含ま
れ、開敷華王如来の固有の真言と見ることができる。kusmāvatiとは、第一章
で説くところの開敷華王如来の世界である開華世界 kusumāvati-lokadhātu の
ことであり、またこの世界は文殊菩薩の本国である。

また、『金剛手灌頂タントラ』いおいても、開敷華王如来の真言が見られる。
説かれる箇所は、四仏以下、諸尊の真言を説くものである。真言は『文殊師利
根本儀軌経』のものとは相違する。なお、印相も合わせて説かれる。

『金剛手灌頂タントラ』に説かれる開敷華王如来の真言

二手を合掌して、挙げて、安ずるのが、寶幢如来の印である。真言に、

namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathātriratnanir
jāta hūṃ hūṃ svāhā /

その印より、二大指を屈して、側に支えるのが、開敷華王自在如来の印で
ある。真言に、

namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathājhānasam-
bhava svāhā /

* 以下、無量光、不動、尸棄、毘婆舍、毘舍浮、拘留孫、大転輪の印言が続く。

先述のように、開敷華王如来の真言といえ、我が国の胎蔵法に伝わる真言(八田幸雄『真言辞典』真言 No.888)が挙げられる。胎蔵法は『大日経』を典拠としているため、ここで『大日経』に説かれる開敷華王如来の真言が説かれているとされる箇所を、検討してみたい。

胎蔵法に説く主要尊の真言は、「秘密八印品」に見ることができる。しかし「秘密八印品」には、真言は説くものの、それに対応する尊名は記されていない。『大日経疏』によれば、「秘密八印品」に説かれる諸印言と、漢訳『大日経』に於てその直前に説かれる「入秘密曼荼羅位品」に説く諸尊を対応させている。つまり、経自体には明確に示されない諸印を、特定の諸尊と対応させたのは、『大日経疏』の解釈であることがわかる。『大日経疏』の他に、『広大軌』『攝大軌』もこの解釈をとる。しかし、この「秘密八印品」の諸真言を直ちに開敷華王如来を含めた八尊の真言と見ることはできないであろう。

以上のように『文殊師利根本儀軌経』『金剛手灌頂タントラ』に説かれる、開敷華王如来の二種類の真言が、ここに確認できたことになる。

ま と め

開敷華王如来は、胎蔵系曼荼羅の中心を形成する主要な尊格にもかかわらず、ほとんどその具体的な姿は知られていなかった。しかし、今まで研究の進んでいなかった『文殊師利根本儀軌経』を始め、数種の密教経典には同尊の系譜を示すいくつかの重要な情報が内包されていた。

以上のことをまとめてみると、まず第一に、開敷華王如来と文殊菩薩との強い関係が認められることが挙げられる。『文殊師利根本儀軌経』『金剛手灌頂タントラ』両経共に開敷華王如来は文殊菩薩の本国主として描写されていた。また、布に描かれるパタ(尊像画)においても、同じく『文殊師利根本儀軌経』『金剛手灌頂タントラ』に説かれ、両尊の関係を端的に表していた。

この開敷華王如来と文殊菩薩の両尊の強い関係は、開敷華王如来の系譜の解明に重要な手掛かりとなるであろう。また、経典間の関連を探るうえでもこの関係は大きな鍵となる。

第二に、曼荼羅の中心構造を担う四仏体系の中に開敷華王如来は組み込まれている。

密教經典に説かれる開敷華王如来について（飯塚）

開敷華王如来は、『文殊師利根本儀軌經』第二章、『一字仏頂輪王經』「大法壇品」において四仏の観念の中に組み込まれる。しかしまだこの時点では完全に曼荼羅の四仏体形の中に組み込まれたと言えない。『金剛手灌頂タントラ』に至って、開敷華王如来を含めた四仏が曼荼羅の構造として確立し、それが『大日經』に受け継がれていく様子が見られる。このように、開敷華王如来は『大日經』系の四仏の展開に密接にかかわるのである。

第三に、開敷華王如来の展開を探るうえでしばしば重要視された、『大日經疏』に記述されるところの「娑羅樹王開敷華王」の表記については、開敷華王如来と娑羅樹王仏の両尊が、複数の經典において併記される例が示すように、同体とは言い難い。しかし、同じ尊格群に属す複数の例が示すことなどから勘案するに、一定の関係は予想されるものである。

第四に、『文殊師利根本儀軌經』『金剛手灌頂タントラ』の二經において開敷華王如来の真言が認められる。従来、我国の真言宗の胎藏法に伝わる開敷華王如来の真言は『大日經疏』の解釈のものであり、固有の真言とは言えない。ここに、開敷華王如来の二種類の真言が確認できたことになる。

第五に、開敷華王如来が經典に説かれる場合、そのほとんどは『大日經』に関係すると思われる初期密教經典であった。つまり、開敷華王如来は『大日經』系の尊格であり、初期密教の尊格であると言える。

開敷華王如来の起源についてはいまだ分からない部分が多いが、樹木神信仰や、密教に於ける文殊菩薩の展開とも密接にかかわるだろう。また、主に四仏の一員として発展してきた開敷華王如来であるが、『大日經』以降はその姿を消してしまう。その役目が他の尊格に取って代わられたのであろうか。

これらのことについては、文殊菩薩との関係、娑羅樹との関連等、いくつかのアプローチが考えられるが、今後の課題としたい。

註

(1)『大正』39p.622c

南方、娑羅樹王華開敷仏を觀ぜよ。身相、金色にして、普く光明を放つ。離垢三昧に住するとき標相なり。菩提心の種子より始めて、大悲の万行を長用し、今、遍覺の万徳開敷を成す。故に以て名と成す。離垢は、すなわち大空の義なり。

(2) 現在までの、開敷華王如来に対する言及は主に次の通り

頼富本宏『密教仏の研究』 p.81

～その中で無視できないのは、西北方の沙羅因陀羅 (Sāleṅdra?) と下方の毘盧遮那 (Vairocana) である。前者の沙羅因陀羅如来が、大日経疏などで開敷華王如来と同一視される沙羅王如来と異ならないとすれば、大日経胎藏曼荼羅で南方を司る開敷華王如来も、上記の十方仏中に認められることになり、次に取り上げる毘盧遮那と合わせて、一般にいう胎藏五仏が具備する結果となろう。

松長有慶『密教教典成立史論』 p.125

この開敷華王如来が微妙声と関係をもつかいなかは明確でない。実又難陀訳の大寶積経卷 58 の文殊師利授記会第十五には、集吉祥王 (東) 獅子勇猛奮迅 (南) 摩尼積王 (西) 沙羅起王 (北) の四仏を記す。また開敷華王如来は沙羅樹王とも呼ばれている。もしこの沙羅起王が沙羅樹王と等しいとすれば、開敷華王如来を北方に置く配置もあったと考えられよう。

(3) 図像表現に関しては、次に詳しい。石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術昭和 50

(4) 『金剛手灌頂タントラ』(東北 No.496 大谷 No.130)

ḥPhags pa lag na rdo rje dbaṅ bskur baḥi rgyud chen po
tr:Śilendrabodhi / Ye Ses sde

(5) 酒井真典『大日経成立の研究』

(6) 「具縁品」『大正』 18 p.5a

行者次於中 定意觀大日 處白蓮華座 髮髻以為冠 放種種色光 通身
悉周遍 復當於正受 次想四方仏東方號寶幢 身色如日暉 南方大勤勇
遍覺華開敷 金色放光明 三昧離諸垢 北方不動佛 離惱清涼定西方仁
勝者 是名無量壽 持誦者思惟 而住於佛室

「入秘密曼荼羅位品」『大正』 18 p.36c

内現意生八葉大蓮華王。抽莖敷葉綵絢端妙。其中如来。一切世間最尊特身。超越身語意地至於心地逮得殊勝悦意之果。於彼東方宝幢如来。南方開敷華王如来。北方鼓音如来。西方無量寿如来。東南方普賢菩薩。東北方觀自在菩薩。西南方妙吉祥菩薩。西北方慈氏菩薩。

密教經典に説かれる開敷華王如来について (飯塚)

- (7) 『仏説大乘觀想曼荼羅淨諸惡趣經』(『大正』19 p.88a) 東北 No. 483,485
大谷 No. 116,117

SKORUPSKI Tadeusz: Sarvadurgatipariśodhana Tantra: Elimination of
All Evil Destinies (Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction,
English Translation and Notes) .Delhi, Motilal Banarasidass, 1983

- (8) 田中公明『曼荼羅イコノロジー』 p.171-172
(9) 『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經』(20 卷) 大正 20, pp.835a-904a 宋
天息災訳 (A.D.986) 『Āryamañjuśrīmūlakalpa Tribndrum Sanskrit
Ser.No.LXX,LXXVI,LXXXIV, Buddhist Sanskrit Texts, No.18 『ḥPhags
pa ḥjam dpal gyi rtsa baḥirgyud』 東北 543、大谷 162
『文殊師利根本儀軌經』に関する基本文献は次を参照。『梵語仏典の研究』
IV 密教經典篇 平楽寺書店 pp.75-79, 拙稿「『Mañjuśrīmūlakalpa』に關
する基本資料」『豊山教学大会紀要』25

- (10) 四方四仏の変遷については次に詳しい。『密教仏の研究』頼富本宏 法蔵
館 1990

- (11) 第二章曼荼羅の概念図は、拙稿において試図してある。「『Mañjuśri-
mūlakalpa』に説かれる曼荼羅について」『豊山教学大会紀要第』26

- (12) 類本の対応表は、頼富本宏『密教仏の研究』 p.112-113

- (13) 頼富本宏『密教仏の研究』 p.80-81

【キーワード】 開敷華王如来、文殊菩薩、初期密教